

文化の伝統を次代へ 上方文化芸能協会の事業を継承



「上方花舞台」(2013年1月30日
/ 国立文楽劇場)
photo © 越田悟全

(左) 地唄「雪」板東玉三郎さん
(下) 長唄「業平」大空祐飛さん



「宝恵駕行列」の芸妓代表 祐子さん
(2013年1月10日 / 大阪ミナミ戎橋付近)

邦舞や邦楽など、大阪の伝統的な上方文化の復興をめざし30年間にわたり活動してきた財団法人上方文化芸能協会が、2012年度末をもって解散し、以後、関西・大阪21世紀協会がその事業を引き継ぐことになった。

上方文化芸能協会は、作家の司馬遼太郎氏をはじめ、作家の田辺聖子氏、山村雄一大阪大学総長、古川進大阪商工会議所会頭、岸昌大阪府知事、大島靖大阪市長、日向方齋関西経済連合会会長、芦原義重大阪21世紀協会会長(全て当時)らが発起人となり1983年に設立された。翌1984年からは、国立文楽劇場(大阪・日本橋)で「上方花舞台」を開催。お座敷でしか見られない芸妓の芸が誰でも見られるようになった。今宮戎神社十日戎の「宝恵駕行列(1月)」や住吉大社の「御田植神事(6月)」など、大阪の伝統祭事にも花街の芸妓が奉仕し、今に続いている。

司馬氏は同協会の設立にあたって「勸進のことは」を寄せ、「私どもの街が持ってきた伝統的な歌舞音曲も、今後、勸進のすがたをとり、私ども大衆の所有物になってゆかねば、ほろびてしまう」と、伝統継承の重要性を訴えている。関西・大阪21世紀協会は、こうした上方文化芸能協会の設立趣意を汲み、上方文化芸能の調査、研究、人材育成などの各種事業を通じ、大阪における伝統芸能の保存発展をめざしていく。

2014年春開業「あべのハルカス」に 新スタイルの都市型美術館が誕生



あべのハルカス(2013年3月現在)
2013年夏に「タワー館(近鉄百貨店など)」の先行オープンを予定している。
画面左下が大阪市立美術館、右手前が天王寺植物・動物園。

2014年春の開業に向けて近畿日本鉄道(株)が近鉄大阪阿倍野橋駅の真上に建設中の「あべのハルカス」は、昨年8月、地上300メートルに到達し、日本一の超高層ビルになった。

地下5階・地上60階、事業費1,300億円の「あべのハルカス」は、百貨店、ホテル、レストラン街、文化ホール、オフィス、展望台などを備える日本最大級の複合商業施設。そしてこの16階に開設されるのが、「あべのハルカス美術館(仮称)」だ。ターミナル立地を活かして気軽に芸術・文化を楽しめる新スタイルの都市型美術館として、国内外の巡回展をはじめ、奈良や京都の近鉄沿線の文化財から西洋美術、現代アートまで幅広いジャンルの展覧会の開催を予定している。ショップやカフェなども併設し、美術鑑賞にプラスした楽しみも提供する。

近畿日本鉄道(株)の小林哲也社長は、今年3月5日の関西経済同友会の講演で、「このプロジェクトの狙いは、当社の経営基盤であるターミナルの機能強化だけでなく、歴史と文化のある阿倍野・天王寺エリアを、大阪の新しい都市格として発展させることにある」とし、「市立美術館や天王寺植物・動物園などの大きな集客力を持つ施設とも、相互にお客様を送りあえる協力関係を構築していきたい」と述べている。

関西・大阪21世紀協会は今年2月26日、インテリジェントアレー専門セミナー(関西社会人大学院連合主宰)において、同美術館特別顧問の養豊氏(兵庫県立美術館館長)を講師に招き、「あべのハルカスからの文化発信」をテーマとする講座を提供。養氏は、「完成すれば西日本一の美術館になる。市民はそれを誇りに思っしてほしい」と語った。



養 豊氏
(インテリジェント・アレー
専門セミナーにて)